

## 第5章 両立支援への要望

この章では、企業・労働者へのヒアリング結果から、両立支援への要望を整理する。

### 5-1 一層の実態把握の重要性

まず、育児と仕事の両立の実態をより詳細に把握する必要性が指摘されている。

Uさんは「現在の政策を検討する上で、実際に子育てをしている家庭や貴重な労働力を提供しながら子育てしている共働き家庭からの要望をきちんと吸い上げて検討されているのだろうか。今後の支援策の検討に際しては、このような現実のニーズの把握を十分にさせていただき、子育て家庭が育児をする上で負担と感じているハードルを着実に解消していただけたらと思う」としている。

ちなみに、Uさんの「職場の同僚で、3人の子育てをしながら、フルタイムで頑張る女性がいるが、彼女はいつも本当に走りながら仕事をしている。『子供を育てる以上は、子供のことは決して手を抜けない。自分は仕事も頑張ってキャリアを積み重ねて行きたい。そう思うと、夫には協力してもらいながらも、足りない部分は夫に我慢してもらい、自分は身を粉にして頑張るしかないのよね』とは、彼女のつぶやきである」という。

また、BⅡさんは「誤解がある言い方かも知れないが、私にとって仕事というのは『して当たり前』のことであり、育児でのストレスを解消する場でもある」という。

### 5-2 企業の両立支援だけの限界

次に、Bさんは「男女共同参画型社会を目指して諸制度等の整備を進めることは必要と認識しているが、その主体を企業だけに任せていても、普及のスピードには限界が感じられる」としている。そして「私自身が子育てしている間は、間に合わないだろう。子どもは社会全体の財産であるとの認識および施策が広く深く社会に浸透することを祈っている。私自身が男女共同参画型社会に向けて貢献できることがあるとしたら、このまま働き続けることくらいであろうか」という。

### 5-3 両立女性労働者のモデル像の必要性

また、後輩達のために積極的な両立女性労働者のモデル像の必要性も示唆されている。

Uさんは「今の世の中で、子育てをしている女性が社会で、企業で、生き生きと輝いて仕事をしたり、子育てしたりできているだろうか。『子供を育てながら、仕事を続けるのは大変よね』などと、子育てに対する後ろ向きな情報ばかり（もちろん子育ては簡単なものではないが）あふれて」といるとの認識を示しつつ、「社会で自己実現しながら子育てをある程度責任をもって、しかもしなやかな姿で、若い女性があこがれるような余裕をもったライフスタイルで生活ができていないのではないかな。もっともっと様々な角度から、女性が子供を産み育

てやすい環境を、政府には急ピッチで推進してもらいたい」としている。

#### 5-4 具体的施策の提案

最後に、ヒアリング対象者からは、以下のような具体的な経済面での施策の提案もなされている。

まずUさんは「児童手当の拡充や出産手当一時金の即時支払い等少子化対策は少なくとも一歩前進はしているが、まだこれで十分な支援とは言えない。これ以上少子化が進むと、現行の年金制度が崩れ、労働力も不足するという危機感が政府にあるならば、『子供は社会全体の財産』という発想に立ち、もっと予算をとって抜本的に経済的支援をしたり（最もお金のかかる中・高・大学生はそもそも児童手当の対象外）、共働きで子育てする家庭を支援したり（看護休暇の有給化、在宅勤務・フレックスタイム勤務等の義務化、安心して子供を預けられる質の高い保育施設をもっと安い保育料での供給等）してはどうだろうか」としている。

またBさんは「子育てしながら働けるとメリットが感じられる、税制面での両立支援措置等を強く希望する。家族が増えることで、収入が減り、支出は増えて、負担感だけが大きく、子どもを持つことに精神面以外のメリットが感じられないことは残念である」とする。

また「最低限の次のステップとして、“両立支援ビジネス”に対する行政的支援が行われることを期待している。例えば、子どもにある程度の教育環境を与えたいと望む場合、幼児期の習い事や家庭での教育活動等は時間的に断念せざるをえないため、子どもの将来性を閉ざしているような罪悪感を抱くことがある。このようなニーズに対応するサービス提供ビジネスが容易に出現するような支援策を期待したい」ともしている。